

遺品整理のプロ「遺品整理士」の資格を取る人が増えている。業者だけでなく、脱サラした人や主婦もいるという。なぜなのか。秋が近づいた平日の朝。千葉市内にある2DKの賃貸アパートの台所には、焼酎の紙パックが積み上がり、居間の壁紙は茶色く焦げてめくられていた。部屋の主の70代男性は7月に他界。「引き渡せる状態にしてほしい」と息子から依頼を受け、遺品整理業者「こころ家」（東京都葛飾区）の山本健社長(38)ら職員3人がやってきた。

まずは仏壇に手を合わせて作業スタート。棚の引き出しを一つ一つ開け、本やアルバムは丁寧にめくる。亡き妻や子どもたちの写真、旅先で買ったベナン、卒業証書の筒。思い出す品々は一つの箱にまとめて、後で遺族に確認してもらおう。「ごみ」に見えても、貴重な思い出かもしれない。そんな緊張感が求められる作業だ。

約3時間後、回収した荷物は段ボール25箱分と70リットルのポリ袋15個分。作業代と廃棄物処理費、家電リサイクル費を含む料金は計約24万円だった。

遺族から感謝

やりがいに

山本社長は元々、不動産会社の営業マンだった。3年前、ニュー入番組で遺品整理業者を見て「人の役に立てる仕事だ」と直感し



作業前に仏壇に手を合わせる遺品整理業者「こころ家」の山本健社長(左)ら。千葉卓朗撮影

「遺品整理士」増えてます 主婦や脱サラした人も

た。2年前の秋に「遺品整理士」の資格を取り、2014年3月に開業した。自殺した娘の親や、事故で恋人を失った男性からの依頼。人の人生に深く足を踏み入れる仕事だが、遺族も知らない故人の手紙や貴重品が見つかり、感謝されることも多い。山本社長は月20件ほどの仕事をこなす。「他では味わえないやりがいがある」と話す。

民間資格反響 取得700人超

「遺品整理士」は、一般社団法人「遺品整理士認定協会」（北海道千歳市）が認定する民間資格で、ちょうど4年前の11年11月に始まった。全国で7千社とされる遺品整理業界だが、これまで業界団体がなく、高額請求や貴重品の盗難といったトラブルが増え始めていた。「優良業者」の指標をつくらせようと、リサイクル会社役員の木村栄治・現理事長が中心となり立ち上げた。通信制講座で、遺品整理に必要な運送や廃棄物処理に関わる法律や制度を学ぶほか、遺族との向き合い方といった心構えへの理解も深める。

資格は当初から大反響だった。問い合わせが殺到し、多い時は1日600件の電話が鳴った。今年8月時点で取得者は7千人を超える。起業を目指すサラリーマンや、不幸があった時のために知識を備えたい主婦や公務員なども増えているという。

「熱くないと続かない」

人気の要因は「やりがい」だけではない。独居老人が増える一方で、親の家の片付けは遺族にとって負担が重い。こうしたニーズの高まりに加え、協会の伊藤友勝事務局長は「仕事に必要なのは倉庫とトラックくらいで、開業資金200万円ほどで始められる」とも指摘する。

ただ、この仕事は甘くはない。山本社長の「こころ家」には就職希望者が訪れるが、多くが数日で辞める。単調できつい肉体的労働で「現実を知って去ってゆくといい」。山本社長は「人の悲しみや喜びに共感できる熱い人間じゃないと、続けられませぬ」。(千葉卓朗)



2015年(平成27年)
11月3日
火曜日
文化の日